
次元の平和を守ります!!

御劔 貴京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次元の平和を守ります！！

【Nコード】

N6839X

【作者名】

御劔 貴京

【あらすじ】

——「魔王討伐?」、その「魔王討伐」——全次元最強に名を連ねる男が任されたのはとある世界の魔王討伐。母性溢れる同僚騎士に、オドオドしてるけど最強の魔法使い、ツンデレならぬツンドラな完璧従者を連れて、騎士であり魔法使いでもある男が異世界を行く！！最強、ハーレム、厨二要素を多分に含みます。それらに嫌悪のある方は注意してください。なお、残酷描写は念のため付けてあります。

ブローグ『Q：魔王討伐？A：そ、魔王討伐』

ユグドラシル・メンバーズ
『世界樹の元に集いし者達』通称『世界樹』。

全ての神々の王『神王』が、『全次元世界の統治と平和』を掲げて設立した組織。次元世界を股に掛けて活動する組織としては非常に小さいが、1000万人規模の会員を要し、その力は全次元最強とまで謳われる。

これは、『世界樹』に所属する1人の男の物語――

「魔王討伐？」

「そ、魔王討伐」

広々とした室内に、二つの音が広がる。

一目見れば分かるほど高価な調度品の数々が、最も美しく見えるよう計算され配置された部屋。ユグドラシル・メンバーズ
世界樹の元に集いし者達、会長室。

その中央、巨大な机を挟むように配置された2つのソファ。他の調度品と同じく、一目見れば価値が分かるほど豪華なそれに、言葉をついだ人物達は向かい合うように座っていた。

『魔王討伐』という単語を聞き、微かに嫌そうな顔をして首を傾げたのは黒髪黒目の青年――ユグドラシル・メンバーズ
世界樹の元に集いし者達会員にして、

世界樹が誇る最強の騎士団『アルカディア聖騎士団』最高位　聖騎士王オーバーロードの位を持つ”人間”『御神貴京』。

嫌そうな顔をする貴京を見てクスクス笑いながら、駄目押しとばかりに『魔王討伐』という言葉を繰り返す銀髪紅眼の美女——世界樹ドラシル・メンバーズの元に集いし者達創設者にして、その会長を務める”神王”『シルヴィア・クラッツベルン』。

2人は今、世界樹で最も主となる活動『次元世界の平和を守るための任務』について話をしていた。

「この世界——ユースティアに生まれ出でた魔王を討伐してほしいの」

そう言ってシルヴィアは、自分と貴京の間にある机の上、ホログラムにより投影された青と緑の2色で構成された惑星を指差す。

「それは……俺を出すほどの任務なのか？」

対する貴京は、相変わらず嫌そうな顔を隠そうともせずに首を傾げた。彼自身面倒臭がり屋というのもあるが、何より彼の位階は『聖騎士王オーバーロード』、世界樹内でも有数の実力者である。単一惑星の魔王討伐なんてのは本来、中堅以下の会員が請け負うべき任務であり、彼が請け負う程の任務では無い。言わば、子供同士の喧嘩を最高裁判所に持ち込む様なものだ。新入りの育成という意味でも、彼が渋るのは別段おかしいことでは無かった。

しかし、そんな貴京に対しシルヴィアはゆるゆると首を振る。

「それがね、貴方を出すほどの任務というよりも、むしろ貴方を出すべき任務なのよ」

「なに？」

シルヴィアの言葉に、貴京の表情が嫌そうなモノから訝しげなモノへと変化する。全次元世界の平和を心より願うシルヴィアが、任務に関する話で冗談を言う筈が無い事は貴京も良く理解しているつもりだ。

「これを見てちょうだい」

そう言って差し出されたのは数枚の書類。そこに書かれていたのは、今回の討伐対象である魔王のステータスを数値化したものだった。

「どれどれ？……これは、マジか」

ザッと流し見る事約十秒、書類から顔を上げた貴京の表情には、先程までの嫌そうな感じも訝しげな感じも残っておらず、純粋な驚きが現れていた。

「総合的に言つて——上の下つてところか」

数値からおおよその強さを予測しそう呟く貴京。

世界樹内で上の下というのは即ち、全次元世界で見てもかなり上位の実力者、それこそ1万人いるかどうかというレベルに達していることを示す。

「少なく見積もっても中の上。どう見てもただの魔王クラスが持つていい力じゃないのよねえ」

「ああ、これは強過ぎる」

通常の魔王だと、その力は世界樹内で言えば下の下、良くて下の中レベルである。これが単一惑星の魔王では無く、次元世界を丸ごと支配するレベルの魔王帝や次元魔王になれば色々変わってくるのだが、それは別の話。

「魔王帝や次元魔王と比べても遜色無いこの強さ。次元世界の平和と均衡を乱す可能性は大いにあるな」

「ええ、それに加えて、諜報部の調査によると相当な野心家らしいから……」

「こりゃ、討伐する必要性あり、か」

「やってくれる？」

「……はあ、しょうがないだろう」

あくまで渋々と言った様子ながら、貴京は溜息を吐いて頷いた。

「ありがとう!」

「他ならぬお前の頼み、任務じゃなくてもやり遂げてみせるさ」

こうして”神々の王”をお前呼ばわりする”人間”『御神貴京』は、魔王討伐という任務を請け負う事になったのだった。

プロローグ『Q：魔王討伐？A：そ、魔王討伐』（後書き）

少しでも皆様に楽しんでいただければ嬉しいです。

これから宜しく願います！！

第1話『Q：後輩？A：いや、上司です』

『貴方1人でも余裕だろうけれど、無理を言ったお詫びとして同行者を2人つけてあげるわ』

任務承諾書に流麗な文字でサインして行く貴京に、シルヴィアは唐突にそう言い放った。

サインと任務内容の確認に気を取られていた貴京は、それに適当に頷く。最低限の内容は聞いていたし、同行者をつけてくれるのなら断る理由は無いと思ったのだが――

「マジか……」

僅か1分後、現れた同行者を見て貴京は思わず万年筆を取り落す。

「今日から宜しくお願いしますね、貴京さん」

「う、ご迷惑にならないよう気を付けます」

部屋に入るなり早速挨拶して来た同行者2名は、1人は同僚で、1人はまさかの上司だった。

最初に挨拶し、貴京の事を『貴京さん』と呼んだのは20代前半の美女。腰まで伸びた流麗な黒髪に、透き通るような漆黒の瞳が印象的な女性だ。しかし、上衣の一部分をはち切れんばかりに押し上げる母性の塊こそ、何より目を惹くだろう。

優しい雰囲気^{オーバー・ロード}を全身に纏った彼女の名は『神宮寺桜』。貴京と同じ『アルカディア聖騎士団』に所属する騎士であり、『聖騎士王』の位を持つ”人間”。入会時期としては貴京の後輩だが、位階とし

ては同僚にあたる女性だ。

そしてもう1人、オドオドした感じで挨拶したのは10代後半の美少女。背の中ほどで切り揃えられた柔らかく繊細な茶髪に、気弱そうな光を灯す薄茶色の瞳、そして見るからに華奢な体躯。

守ってあげたくなるような、小動物的な雰囲気を纏う彼女の名は『シエル・オーヴァーロード』。世界樹最強の魔導師集団『聖アヴァロン魔導師団』の団長にして、最高位『大賢者』の位を持ち、極めつけは初代にして永世なる天界の長『天帝』でもある”天人”。容姿も雰囲気も後輩つばさ満載だが、間違いなく貴京の上司であり、生きた歲月もこの場ではシルヴィアの次に長い。

2人共今回の任務難易度に全く見合わない規格外の実力者。貴京が思わず万年筆を落とすのもそこまでおかしいことでは無い。

「いやしかし、本当に冗談とかじゃなく、本気でこの3人で任務に臨むのか？」

と、落としてしまった万年筆を拾いつつシルヴィアに問いかける貴京。やけに真意を探るその様子からも、ありありとした困惑が伝わってくる。

「流石の私も、冗談でこの面子を呼び出すほどバカじゃないわよ」

対するシルヴィアは、そう言ってクスクスと笑った。貴京はそれを見つつ心中で、こんな任務で集めた時点で既にバカだと毒づく。

「バカで悪かったわね」

思いつ切りばれている、笑顔がこわい。

「心を読むなよ」

「顔に出てたわよ」

グイツと迫って来るシルヴィアに、貴京は悪かった悪かったと言
って頭を下げつつ、改めて部屋に集まった人々を見回し一言。

「うん、何度見ても戦力過多だ」

自分含め世界樹が誇る最強クラス2人（自分と桜）に、名実ともに最強と呼んで差し支えない者が1人（シエル）。甘く見積もっても上の下クラスの魔王には、どこからどう見ても過ぎた戦力である。

「いや、何も理由なくこれだけの戦力を集めた訳じゃないのよ?」

「あん?」

と、流石に貴京の視線と言葉が痛くなってきたのか、微かな苦笑
いを浮かべながらシルヴィアは説明を始めた。

「ぶっちゃけちゃうと、貴方含め最強クラスの存在を出す必要がある
任務って全然ないのよね。貴方も今回の任務、100年ぶり位で
しょ?」

「まあ、そうだな……」

正確には103年2カ月13日ぶりだなーと、規格外な記憶力を
発揮し無駄に記憶を掘り返しまくる貴京。その日の朝食が忙しくも
無いのにコーヒ一杯だけだったことまで思い出した。驚愕のひも

じさと無駄さ加減。

「貴方達も世界樹に所属してる以上、任務を全く与えない訳にはいかないのよね。下の者に示しが付かないっていう感じがしら。任務が無くても身分にあった給料を与えてるから、尚更ね」

「ふむ……」

全次元の平和と統治を目的とした組織である世界樹だが、基本的に任務中に必要な金銭は自腹なため、しっかりと賃金が支払われている。ちなみに月給制であり、貴京クラスになると僅か1カ月で一生遊んで暮らせる額が手に入るから驚きだ。

まあ、それらは全て最高級の魔草や霊草、宝玉などの素材に消えている訳だが。

「ここまで言えば、私が何を言いたいのかわかるでしょ？」

「つまりは、任務を与えない訳にはいかないから、手近で一番難易度が高そうなのこの任務に俺達3人を無理矢理宛がったと」

「まあ、そういうことね」

相変わらず気まずそうな笑みのシルヴィアを数秒見つめ続けた貴京だったが、唐突に溜息を吐いて立ち上がる。

「はあ、分かったよ。俺らでちゃっちゃと魔王を倒してくればいいんだろ？」

「……ありがとう貴京!!」

「いえいえ、お任せ下さい。会長」

何千年生きようと女性には勝てないなあと、こんなところでしみじみ感じる貴京だった。

「えと、任務に参加するのは私達3人、で良いんでしょうか」

任務関係の書類提出も終わり会長室を後にした貴京、桜、シエルの3人は、いよいよ任務地のユースティアに向かうため、持ち物や人員の最終確認を行っていた。

「いや、4人だな」

「「え？」」

そこでシエルが発した任務参加人員の確認を訂正する貴京に、桜とシエルの2人が思わずハモる。

「任務に参加するのは4人だ。俺ら3人+1人、俺の従者が一緒に来るはずだ」

貴京のその言葉に、一瞬考える素振りを見せた桜がポンと手を打って笑みを浮かべる。

「従者っていうと、アリシアちゃんのことかしら？」

「ああ」

「えと、じゃあ、今から呼びに行くんですか？」

「いや、そんなことしなくてもあいつは来るさ」

「「え？」」

本日2度目のハモリに、貴京が微かな笑みを浮かべると同時――

「お呼びですか？主様」

月光の様に煌めく銀髪を靡かせ、完璧と謳われる従者は姿を現した。

第2話『Q：ツンデレ？A：いいえ、ツンドラです』

——『完璧』

それが貴京の従者『アリシア・エーデルフィート』に対する世間一般の認識だ。

男女問わず魅了する神懸かり的な美貌に、命じられたことは命を賭してまで完遂する仕事振り。

確かに完璧、そう言えるだろうと貴京自身も思っている。しかしそんな彼女にも、限られた者しか知らないちよつと残念な点がある

「おうアリシア、流石行動が速いな、俺が呼ぶまでも無く——」

「主様の行動が遅すぎるのです。もう少し早く私を呼べないのですか」

主に対する言葉遣いは、ツンデレならぬ極寒のツンドラである。

言葉の内容は『速く私を呼んで欲しい』という願望のはずなのに、何故ここまで冷たくなるのか。貴京自身も常に首を傾げる問題だ。

「あらあら、相変わらずアリシアちゃんはツンツンねえ」

「あの、えと、こんにちわ、アリシアちゃん」

「こんにちわ、主様がご迷惑をおかけしております。桜様、シエル様」

「かけてねえよ」

さらりと口にするアリシアに、流れるように突っ込む貴京。
非常に息びったりなのだが、会話の内容が少々あれである。まあ、御愛嬌といえはそれまでなのだが。

「——で？今回の任務、お前も来るんだろっ？」

「何を言っているのですか主様、当然です。まさか私が主様から離れるとも思っているのですか？馬鹿なのですか？」

「お前マジでその喋り凄いな」

長年連れ添ってきても未だ慣れない内容と喋りの温度差に、貴京が思わず突っ込む。

「——ふふっ」

「くっ、ふふ」

それを見つつ、我慢できないといった様子で声を押し殺し笑う桜とシエル。

「お前ら……はあ、本当に大丈夫なのかこのメンバーで」

一周回って協調性が全く無さそうなメンバーを見回し、貴京は今日何度目か分からない苦笑を漏すと同時に、ふと首を傾げた。

「ん？このメンバーといえば」

「「「？」」」

3人揃って首を傾げる可愛さ爆発女性陣に、貴京は思い付いた疑問を口にする。

「いや、アリシアは俺が行くところには必ず付いて来るから疑問は無いが、桜とシエルはこの任務に来ることに疑問無かったのか？俺の強さを知ってる奴なら、こんな任務俺一人で十分だと分かるはずなんだが」

それは貴京の驕りでも何でもなく、この場にいる全員が理解している紛れもない事実。

今回の魔王討伐任務はどう考えても貴京1人の力で十分であり、先程貴京がした様な『え？この任務に3人も最強クラス投入するのマジで？』というのが普通の反応なのだ。

自分と同じようにシルヴィアに説得されたのではと考えもした貴京だが、考えずともとりあえず聞けば全てが判明する——そんな何気ない興味から放った一言だったのだが。

「え？い、いや、ほら、私達もシルヴィアさんに説得されたのよ、ねえシエル？」

「は、はい！！説得されたんです」

「ん？」

受け答えが明らかに挙動不審、しかも、普段から気弱で若干挙動が怪しいシエルはまだしも、常に落ち着いた雰囲気を纏っている桜までも動揺が目に見える。

これは何か裏があると思い、探り出そうかと貴京が口を開きかけた瞬間。

「無粋ですよ、主様」

ゴスウー！という、人体から聞こえてはならないような音を響かせて、貴京の背にアリシアの蹴りが突き刺さった。

「ぐああああ！？いてえええええ！？」

残像を残すほどの超高速、さらにはハイヒールを履いた足での蹴りに、流石の貴京も目に涙を浮かべ床を転げ回る。

「ちょ、おま、何するんだ！？」

「何するんだじゃありません。主様の鈍感な昔からの事ですが、鈍感なら鈍感らしく変な探りを掛けずに黙っていてください」

「え！？御免！！本気で意味が——ぐああああああ！？」

ゴリゴリゴリと、アリシアのスラリとした長い脚が貴京の額を踏みつける。ヒールの部分が額の中心にジャストで当たっており、常人ならとうの昔に頭がい骨が砕けているところだ。

「全く……少しだけヒントをあげるとしたら、この任務は私達4人での旅。今の所ですが、余計な邪魔者はいない。つまり私達女性陣3人にはチャンスという事ですよ」

「そう、チャンスなのよ」

「チャンスなんです」

「な、何の？」

「主様との距離を縮めるです」

「え？アリシアとは主従だし、桜とシエルは友人だと思ってるし、十分距離は——ぎゃああああああ！？」

メキメキと、そろそろ本格的にヤバそうな音が貴京の額から響き始めるが、アリシアは微塵も力を緩めないどころかさらに強くして行く。

「狙ってるんじゃないかと思うぐらい鈍感ですね。死にたいんですか？てか死んでください」

「ちょ！？マジで死ぬ！！タイム！！頭蓋骨に穴開く！！」

「開けます」

「ぎゃああああああああ！？」

この後約1分に渡り、世界樹本部の廊下には貴京の叫びが響き続

けた。

「あー、結局なんで付いて来るのかも分からんし頭がまだメツチャ痛い」

「——何か？」

「いえ何でも無いですアリシアさん！！えっと、あ、そうだ！！最終確認！！忘れ物は無い！？」

「無いわよー」

「えと、ありません」

「万事OKで御座います」

任務に参加する4人全員が揃った貴京達一行は、色々あったもののなんとか準備を終え、ようやくユースティアへと出発である。未だに疑問は解消されていない貴京だが、アリシアが怖かったので忘れる事にした。

「じゃ、行くぞー」

ユースティアまでの足——即ち世界間移動術式行使の役にいつの

間にか指名されていた貴京が、術式が複雑で面倒臭い頭が痛い云々文句を垂れつつも準備した魔法陣に魔力を籠め始める。

貴京の魔力に反応し、加速度的に輝きを増して行く純白の魔法陣。
発動するのは移動系統魔法の中でも最上位に位置する ワールド・ゲート 世界門 と呼ばれる次元時空超越型移動魔法。

「いざ！！ユースティアへ出発！！」

貴京の声が響くと同時、今までとは比べ物にならないほど眩い輝きを魔法陣が放ち、それが周囲一帯を包み込む。

数秒後、輝きが収まった後には既に貴京達4人の姿は無く、床に描かれた魔法陣だけが静かに残っていた。

「はい到着つと」

鬱蒼と木々が生い茂る森の中、丁度よく開けた広場の様な場所を日光とは明らかに違う純白の輝きが包み込み、その中から男の声が響く。

「相変わらず貴京の ワールド・ゲート 世界門 は快適ねえ」

「あつという間ですね！」

「流石は主様です」

次いで響く女性3人の声。ゆっくりと収まって行く輝き、その中から現れたのは、世界樹本部からユースティアへと転位してきた貴京達一行である。

ここは付近の住民から『宵闇の森』と呼ばれている森林。ユースティア全体で見れば中の下にランクされる魔物が数多く生息しているそれなりに危険な森だ。

無論、貴京達の前ではその程度木っ端に等しい訳だが。

「さてと、まずは森から抜けるぞー」

「分かったわー」

「分かりました」

「畏まりました」

魔王討伐部隊のリーダーとなっている貴京の号令に、3人がそれぞれ返事をする。本来シエルは貴京よりも上の階級、即ち上司なのだが、世界樹では階級による上下関係はそこまで厳しくない。そのため、たとえ上司であろうと、任務中リーダーの指示には原則従うのだ。

「そういえば、俺今日の朝コーヒー飲んだだけだからお腹空いてるんだよ……」

と、100年前とは違い私用による忙しさで朝食を摂れていない

貴京が、ぐでーっと愚痴を零し、のんびりと歩きだした貴京達一行だった――

「――」

ピタリと、次の瞬間には4人全員が何かを感じ取った様に立ち止まった。

「主様」

「ああ、俺にも聞こえた」

「今のは人の声、ですね」

「桜」

「4時の方向、直線距離で550メートルといったところかしら」

貴京達が捉えたのは人の声、より正確に言うなら女性の悲鳴。常人なら到底聞き取れないほど微かなそれを、規格外な身体能力を持つ4人はいとも容易く拾い取る。

それだけでは無く、方角と距離までも割り出すのだから流石としか言いようがない。

「のんびりしてる余裕は無さそうだ――走るぞッ!」

「了解！！」

森の中に響き渡る声、4人はそれが消えぬうちに疾風の如く走りだす。

その表情に先程までののんびりした感じは微塵も無く、皆真剣そのもの。木の根に足を取られただけで命取りになる様な速度で、迷いなく木々の間を疾走する。

左右の木々が猛烈な速度で後方へ流れて行き、自らが地を蹴る音さえも遥か後方に置き去りに。

——550メートル

ほぼ誤差は無いだろう桜が提示した距離を走破するのにかかった時間は、わずか1秒。

「そこかつ！！」

開ける視界、降り注ぐ陽の光。街道へと飛び出した貴京達4人の目に飛び込んできたのは、巨大な狼や、虎の胴体と鷲の頭部を融合した様な合成獣^{キメラ}など、数多の魔獣に襲われ、必死の防戦を展開している人間の一団。

「俺とアリシアは襲われてる人の援護、桜は周囲の警戒、シエル！ 殲滅を頼めるか！！」

「は、はい！！」

速度を緩めつつも止まるより先に飛ばされる貴京の指示に従い、

4人は一瞬にして陣形を組む。

各々が持つ良心、そして――

『全次元の平和と統治は、小さな幸せの積み重ねによって成されるべきである』

世界樹が掲げる最大理念の元、全次元最強クラスの力がベールを脱ぐ。

第3話『Q：妥当？A：いいえ、やり過ぎです』

貴京、桜、アリシアは、魔獣に襲われていた人間達の前に。シエルは、突然の乱入者に驚き若干距離を開け様子を窺っている魔獣達の前に。

それぞれ受け持った役割に応じた位置に陣取る。

「あ、あの……」

「ん？」

と、貴京が立った場所の丁度真後ろ。貴京達がこの場へ来る原因になった悲鳴と同じ声をした女性、即ち、貴京達がこの場に来るきっかけを作った女性が、怯えと希望が入り混じったような複雑な表情で貴京に声を掛ける。

「貴方達は、一体？」

発せられたのは、簡潔ながら女性が今一番知りたいだろう問い。出来る事なら答えてやりたかった貴京だが、世界樹の様に次元を股に掛ける組織の存在はそう簡単に明かして良いものではない。

「うーん……まあ、通りすがりのお節介焼きだとも思っ下さい」

なので仕方なく、嘘にならない程度に誤魔化す。追及されたらどうしようかと思っていた貴京だったが、その心配は杞憂に終わった。

貴京の前方、魔獣と対峙していたシエルが動き、女性の意識もそちらへ向いたのだ。

「神装『天空杖　天空守護する白磁の大杖』——展開!」
ウラノメトリア

響き渡るシエルの声、それに応えるかのように、彼女の首に提げられたネックレスが光の粒子となって形を変えて行く。

やがて形作られたのは全長2メートルほどもある純白の大杖、銘を『天空杖　天空守護する白磁の大杖』ウラノメトリア。宙に静止するそれを手にとると同時に、シエルの体から純白の魔力が立ち昇り始める。

「おいおい、いきなり”概念礼装”とは、張り切りすぎじゃないか……?」

——『概念礼装』またの名を『神装』

それは、武術に精通した騎士であると同時に、実は優れた魔法使いでもある貴京が創り出した人知を越える道具の総称。

広い意味では『魔道具』や『魔法礼装』などと同じ『魔導物品』に分類されるが、その力は他の魔導物品とは一線を画す。

魔道具が『道具に魔術的意味を持たせた道具』、魔法礼装が『道具の中に魔法を組み込んだ道具』であるのに対し、概念礼装は『道具の中に概念を組みこんだ道具』。

『そういうものである』という概念をダイレクトに内包したその力は、まさに規格外。魔法としても最上位、概念魔法に分類される

製造法を知るのは、全次元でも貴京のみである。本人曰くその特殊性から、たとえ知っていようと行使できるような存在は全次元で5人といないそうだが。

そんなただでさえ規格外な概念礼装の中でも、さらに規格外、最上位にランクされる作品群、それがアリシアの持つ『天空杖 天空ウラノメトリア守護する白磁の大杖』を含む『天空白磁シリーズル・セント・セリカ』。

デフォルトで待機形態（持ち運びに便利なネックレスや指輪などの小物の姿）と展開形態（本来の武器の姿）を持ち、内包される概念も強力無比なものばかり。

たった1つで次元世界のパワーバランスを覆すとまで言われる、神話クラスの兵器である。

「あれの内包概念は『天候操作』に『天体操作』、『全属性強化』おまけに『魔力増幅』。あんな雑魚共相手に展開する様な武装じゃないんだがな……」

微かに苦笑しつつ、誰にも聞こえないほど小さな声量で貴京が言葉を紡ぐ。それと同時に、大杖を持ったまま目を瞑り、静かに集中していたシエルが動きを見せた。

フオン！という独特な音と共に、シエルの足元に展開される純白の魔法陣。加速度的に輝きを増して行くそれに呼応するように、彼女の眼前にも同じく純白の魔法陣が展開され、純白の魔力が見る見る収束されて行く。

発動準備にかかった時間は僅か数秒、魔法陣の輝きが直視できない程の光量になった、その瞬間、

「貫け！！　ホーリー・アロー　聖光の矢　！！」

発動キーになる短い詠唱と術式名をシエルが叫び、魔法陣から銀光の矢が撃ち出された。

響く風切り音も置き去りにして、その速度は文字通り光速。光り輝く矢は一瞬にして魔獣の群れへと到達し、先頭の一体に避ける間も与えず直撃する。

巻き起こる光の爆発——光の矢に込められていた聖なる魔力が解き放たれ、一か所に固まっていた魔獣は抵抗する間もなく光の奔流へと呑みこまれる。

魔法の効果はそれだけにとどまらず、爆発の余波が周囲を蹂躪し、近くの地面や木々が削りなぎ倒され、貴京達の場所でさえ気を抜けば吹き飛ばされそうなほどの暴風が吹き荒れた。

純粋な魔法の威力に加え、【聖光】【破魔】【浄化】などの属性効果。さらに魔法を行使したのは全次元最強の魔法使いで、サポートしたのは全次元最高クラスの魔杖。

いかに　ホーリー・アロー　聖光の矢　が初級の魔法だったとしても、直撃を受けた魔獣達の末路は火を見るよりも明らかだった。

「直撃または爆発に巻き込まれ、跡形も無く消滅か……　ちょいやり過ぎかなあ」

光の爆発が収まった後、唯一残った巨大なクレーターを見て貴京は複雑そうな笑みを浮かべるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6839x/>

次元の平和を守ります!!

2012年1月8日07時46分発行